

■■■ 震災からの20年、デイサービスの10年 ■■■

今年の1月17日で阪神・淡路大震災から20年を迎えました。

震災から20年の節目ということもありさまざまな追悼行事や催しが開催されましたが、KFCも阪神・淡路大震災が契機となり生まれた団体としていくつかの事業に参画しました。

1月18日にピフレホールで開催された「音楽で紡ぐアジア共生のつどい」では、KFCが実行委員会の事務局を引き受けたこともあり準備から当日の運営までKFC関係者の大きな協力を受け沢山の方に参加してもらうことができました。紙面を借りてあらためて感謝の意を伝えさせていただければと思います。

「音楽で紡ぐアジア共生のつどい」は、当日会場に来ていただいた方には伝えることができませんでしたが、阪神・淡路大震災後、長田区で炊き出しなどのボランティアを主導した南信吉さんという在日コリアン2世の人が癌で亡くなる前に願った「共生の思いをつなぐコンサート」を開催したいという遺志を引き継ぎ実行委員会を結成し開催されたものです。

私は2013年12月、南信吉さんが亡くなる3日前に奥さんから連絡を受け面会しましたが、その時南信吉さんが語ったことが印象に残っています。「自分は、日本で生まれ育った2世としてヘイトスピーチみたいなものがTVで取り上げられているのを見るといたたまれない。日本人も外国人も一緒に助けあった阪神・淡路大震災の時の気持ちを思い起こせるよう中国や韓国、日本の人が演奏するコンサートを開きたい」という言葉です。

人はいろいろなことを忘れます。また忘れなければ生きていけないことも多いですが、風化させてはいけない気持ちがあるようにも思います。たくさんの方の思いを引き継ぎ今があることを心に留めたいと思います。

今年はまだKFCが被災した在日コリアンハルモニ（おばあちゃん）たちとはじめた居場所づくり事業が、介護保険制度を使った「デイサービスセンター ハナの会」となって10年目の年ともなりました。ささやかですが1月27日、28日の2日間、「デイサービスセンター ハナの会」の10年のお祝いの会を開催させていただきました。平日にもかかわらず50名近い方がお祝いに来てくれました。中には昔スタッフだった人が赤ちゃんを抱いて連れて来てくれました。そんな姿を見ることも出来、嬉しさと月日の移りかわりの早さも感じました。

生まれた国を離れ移住した土地で年を重ねることがどのようなことか私は想像しかできませんが、ハナの会の10周年には、利用している在日ベトナム人の男性利用者からベトナム語による感謝の詩が寄せられたり、中国残留邦人帰国者2世の女性利用者から中国語のメッセージが寄せられるなど、今の「ハナの会」が国境を超えた人たちの老後の場として機能していることにほっともしました。

インフルエンザが大流行していたこともあって一番はじめから来てくれている在日1世のハルモニの二人が来られず（今は元気に復帰しています）残念でしたが、参加してくれた高齢者による歌って踊っての「ハナの会」の歓迎は何年たっても変わりません。

お祝いに来てくれた人と一緒にご馳走を食べ、定番の歌を合唱するなどして過ごした「デイサービスセンター ハナの会」の10歳の誕生日は、在日コリアン、日本人、ベトナム人、中国残留邦人帰国者も、昔は排除されていた男性（これが一番の変化にも感じます）も利用するようになった「ハナの会」の可能性を感じる区切りになったように思います。

20年も10年も日々の積み重ねでしかないのかもしれませんが、生まれた赤ちゃんが大人になる20年という時間を振りかえるととても長く貴重な時間です。KFCは貴重な時間を大切に重ねて

こられてきたのではないかと感じます。

振りかえればできなかつたこと失敗したことばかり思いだすことも多いですが、排除されない、排除しないことの意義を日々の働きで伝えられるKFCとなれるようこれからの時を歩めればと考えます。(理事長 金 宣 吉)

■■■KFC日本語プロジェクト■■■

◆2014年文化庁事業シンポジウム「地域日本語教室のあり方を考える」

2月21日、(公財)神戸国際協力交流センター(KICC)会議室において、2014年文化庁事業シンポジウム「地域日本語教室のあり方を考える」が開催されました。参加者は約30名で、多治比さんの司会で進められました。

第一部 兵庫県における外国人県民の日本語教育について～地域住民として共に生きる視点から～

(公財)兵庫県国際交流協会(HIA) 日本語教育指導員 財部さん

兵庫県の在留外国人は約96,500人で、その内の約45%の人が神戸に住んでいます。県内地域日本語教室は約100あり、課題としては、①県内の日本語教室未設置地域があること、②本当に日本語学習を必要としている人に来てもらっているか?、日本語学習が生活につながっているか?等があります。それぞれに対し、市町や市町国際交流協会等と協働してセーフティーネットを兼ねた日本語教室の開設を進めたり、生活者のための日本語教科書を作り、すぐに役立つ日本語講座の開設を進めています。教科書は生活便利帳として持ち歩きができるようにも工夫されている等の説明がありました。

第二部 I「どうやって日本語を学習するか、私の方法」

コーディネーター 大阪大学大学院 青木教授

翁旭波さん(中国出身、神戸学生青年センター)、劉叢叢さん(中国出身、KFC)、橋本亜希子さん(フィリピン出身、KFC・KICC・HIA)、アルチャナ・シリス・パトラさん(インド出身、Quest大久保日本語教室)の4人の方から話がありました。学生として、御主人の関係、親御さんの関係で昨年日本に来られた方がほとんどでしたが、日本語でわかりやすく説明されました。元々意識の高い方々ということもあり、来日前にひらがな・カタカナ・簡単な会話は勉強してきており、来日されてからも、日本語教室で勉強すると同時に、インターネットやテレビでアニメ・ドラマを見たり、アルバイト先や出かけた先で積極的に話をしてトレーニングしているようです。最初は1対1での学習で、慣れてきたら色々な先生に教えてもらう方がいいとか、文法の学習に関しては、特に最初の時期には母語の解説書を使った方がいいとか、動詞の活用が難しく、本では理解できるが、実際に話してみるとなかなか分かりにくい等の話がありました。中には、日本語は簡単だという方もいました。

第二部 II「学習記録簿の取組からみえてきたもの」

コーディネーター 大阪大学大学院 青木教授

KFC奥さん、兵庫日本語ボランティアネットワーク(HNVN)後藤さん、神戸学生青年センター都築さん・河南さん、HIA村上さんからそれぞれ、学習記録簿・チェックシートを使ったそれぞれの事例報告と効果・課題についての話がありました。効果としては、学習者・支援者とも意識を持って取り組むようになったこと、学習の振り返りの時間となったこと、学習の軌跡がわかること、学習態度・方法を変えられたこと等がありました。課題としては、使い方の認識

が十分には徹底されていないこと、学習課題を探るためにもっと学習の振り返りに活用する必要があること、支援の場との連携を深めるためにも継続が必要であること等が挙げられています。その他、あまりリフォームに拘らずに、まず、書いて記録に残すことが重要であるとのアドバイスもありました。

最後に参加者交流会が行われ、インド出身の学習者のラジア・カツーンさんがこの交流会のために作ったソヤビーンスイーツをいただきながら歓談しました。

(ニュース係 川淵 啓司)

◆研修会「中国残留邦人帰国者らの課題と支援について」

2015年1月20日、神戸市立地域人材支援センターの会議室で「中国残留邦人帰国者らの課題と支援について」という「研修会+交流会」をKFC理事長の金宣吉を講師に迎え、行いました。

参加者は、帰国者の日本語教室に携わっている人で総勢13名でした。

まず、中国残留邦人が生まれた背景と戦後の日本政府の政策の問題、日本に住み始めてからの苦悩、帰国者による訴訟と勝訴による支援策の話で全体像を迫りました。

そして、中国残留邦人帰国者と外国人高齢者に対して2010年に行ったKFCの調査に基づき、経済状況、母国・生育国との交流、教育、差別の問題を取り上げ、帰国者らに対して、

①地域のコミュニティ（自治会、婦人会など）での包摂が難しいため「やすらぎ」の場の必要性、②上記の場への参加が困難な人らへの介護保険利用等の促進の必要性、分散居住の解消や「やすらぎ」の場への援助の必要性、③活動を支える人材育成の必要性をあげました。

③の人材には当事者性をもった2世などが有償で行ったり、公的機関ポストの設立・拡充が有効ではないかという提案がありました。

調査から中国残留邦人帰国者及び外国人高齢者全体に言えること、そして、日本のコミュニティでは言葉が通じない、文字が読めないということも含め、生活共有体験を含めた「文化」の違いの問題があり、自分の「仲間」との交流を求めていることが明らかである。そういう意味でも「仲間」が集える場の必要性の訴えがありました。

最後に、KFCでは、母語で話せる場、太極拳ができる場、活動内容は違うけれども自分の「仲間」の場、常に当事者視線の当事者主体の場を作り提供する努力をしており、中国残留邦人帰国者だけでなく、すべてのマイノリティ活動の基本理念に通じるということでした。

研修会の後は、帰国者新長田交流会に参加し一緒に秧歌踊りをし日本語教室とは違う一面を垣間見ました。更にKFCのグループホームに併設している小規模多機能の場所を見学し、そこでの利用者の問題をスタッフから聞くなど充実した会になったのではないのでしょうか。（奥 優伽子）

■■■KFC外国にルーツを持つ子どもの学習支援■■■

◆年末お楽しみ会

12月25日(木)学習に来ている子どもたちと、定住外国人子ども奨学金の奨学生である高校生たちの交流会を総勢25名で行いました。

最初は、高校生たちに小学生の学習支援を行ってもらい、中国語などでも話をしながら、学習してもらいました。

子どもたちは、何度か高校生たちと会っていることもあり、すぐに打ち解けていました。（打ち解けすぎてやかましいぐらいでしたが、）

学習の後は、恒例のホットケーキ作りときなこもちづくりをしました。おもちは少し硬くて不評でしたが、ホットケーキは思い思いにトッピングをして、お腹いっぱい食べました。

おやつのは、2015年の干支である羊イラストコンテストの入賞者発表と商品贈呈が理事長より

ありました。その後、高校生たちから、子どもたち全員にプレゼントを贈呈し終了しました。ロールモデルとなるお姉さん、お兄さんたちとの再会を喜んでいる子どもたちを見て、またこういう機会を持ちたいと思いました。

◆保護者への学校説明会～プレスクールでの取り組み～

2月7日（土）に、就学前の子どものプレスクール事業に子どもを通わせている保護者対象の学校説明会を開催しました。

元小学校教員の小城先生から、入学前にすること、入学後にすることを中心に、お話をいただきました。

保護者からは、「入学式はランドセルが必要か」「1クラスに35人もいて、先生はちゃんと子どもを見ることが出来るのか」「幼稚園は先生1人に子ども5人ぐらいで面倒を見てもらえたが、小学校に入ったら全部一人でしないといけないのではないか」「テストはいつから始まるのか」「学校の行き帰りが心配」などの質問等がありました。

また以前、保護者から「『あゆみ』（小学校の成績表）の見方がわからない」という話を伺ったことがあったので、「あゆみ」の見本を見ながらの説明や、毎日チェックしなければならない連絡帳の見方やサインをすることなどの説明もしていただきました。

小城先生に丁寧に疑問などに答えていただいたおかげで、特に初めて子どもを日本の小学校に通わせる新渡日の保護者は安心されたようでした。（志岐 良子）

■■■ KFC中国帰国者支援事業 ■■■

◆料理教室

この度、初めて、料理教室に参加しました。講師の先生はどんな方なのか。どんな料理を教えてくださいのかなといういろいろ想像して、興味津々で早く教室にきました。

教室につくと何人がすでにいました。聞くと、今日の料理教室は先生がいません。来る人が自分で料理を作るのだと分かりました。そうするとすぐに、支度が始まりました。ジャガイモの皮を剥いたり、もやしを洗ったり、メリケン粉を練ったりしました。準備ができた後、「春餅」を作りました。最後、ジャガイモの炒め物とゆでもやしと炒めた豚肉和え物と手羽先の煮物を作りました。

人が段々と大勢になりました。料理を楽しむ時間にもなりました。

実はこの日はクリスマスの前日で、クリスマスのお祝いに兼ねて、帰国者たちの忘年会だったのです。理事長様からお祝いの言葉をいただき、賑やかな忘年会が始まりました。とても温かい雰囲気、自分で作った料理を食べながら、話しながら・・・時間を忘れて、まるで一つの大家族のように楽しかったです。

2014年は大変お世話になりました。新年も良き、平穏無事な年であるようお迎えください。2015年もどうぞ、よろしくお願い申し上げます。（嶋田 京美）

■■■ ハナの会 ■■■

◆ハナの会の調理担当より

こんにちは。私は趙顯始（チョウ ヒョンヨン）です。

2015年の新しい年度になりましたが、はやくも二月になって、時間の経つのが本当に速いなと感じています。

私が日本に来てからおおよそ5年になっており、このハナの会（KFC）に入社した期間も大体4

年ぐらいになりました。

この事実に基づいて言うと、私の日本の生活はハナの会の話の抜いては説明できません。

私が日本に来た理由は主人のキリスト教宣教師という仕事のためでしたが、彼の神学校の学びや娘たち二人の学びを支援するために仕事を探さなければいけない状況にありました。

その時、入社をさせていただいて、わたしの家族の生活が安定となって、忘れないほどの恵みを受けることになりました。

日本料理の作りかたは難しく、利用者様の好みも分からなかったので最初の頃は失敗もたくさんありました。でもあたたかい心でやさしくていろいろ教えてもらったのでだんだんできるようになりました。日本料理の作り方も学び、作れるようになりました。これからもおいしい料理を作れるように努力します。

新しい年度にあたって、このような感謝のこころをたくさん抱えながら皆様にお返ししたいです。つづきまして、皆様に天の神様の祝福と守りが豊かにありますようにお祈りいたします。本当にありがとうございます。（趙 顯 始）

■■■ グループホーム ハナ ・ 小規模多機能型居宅介護ハナ ■■■

◆第1回事例発表会を終えて 山根施設長の掛け声のもと、2月26日（木）に第1回事例発表会がグループホームハナで行われました。

当日は、グループホームからバラエティに富んだ5題の発表がありました。グループホーム職員だけでなく、KFC本部からは金理事長、ケアマネージャーの吉本、ハナの会の呼和徳力根が参加し、外部からは、グループホーム更紗や協同病院の方にご参加いただきました。小規模多機能の職員である私は司会を務めました。13：30～15：00という時間にして1時間半しかないのに、とても濃密な時間でした。

事例の内容は、

- ①生活リハへの取り組み（3F星野）、
 - ②傷口にビオレを使うって？（2F淡田、朴、看護師山根）、
 - ③もっと身近に使いこなせるカーデックスの活用（2・3F、発表は3F担当尹）、
 - ④初めての看取りについて（2F金）、
 - ⑤24時間シートを活用し：て排泄改善を試みる（3F渡邊）
- でした。

どの発表もとてもすばらしく、現場で試行錯誤を重ねながら、苦勞をして積み重ねていったことがよく伝わりました。グループホームの職員のパワーとひたむきさに、時に感動しながら、前に立っていたように思います。

私が最も印象に残っているのは、事例④の「初めての看取り」です。病名と余命が分かってから看取るまでの期間を、利用者の状況とあわせて、職員や家族の気持ちがいかに戸惑い、揺れ動いたかを克明に発表され、胸を打つものがありました。初めて体験する職員が多く、医療知識も十分でない中、不安な気持ちと「本当にこのやりかたでいいのか」という迷い、状態が悪化していく利用者を見守るしかできないことへの辛さや、揺れ動く家族の気持ちを身近で感じることの苦しさなど、様々な感情に翻弄された日々であったことが伝わり、参加していた職員一人ひとりの感想を聞いたときでも、最も反応があったように感じました。亡くなった後でも、「これでよかったのか」と自問自答をすることもあったようで、感想の中で職員の一人が話したグリーフケアへの取り組みも今後はあってもいいのかもしれません。

最後に、職員の感想の中で印象に残った言葉として、「こうして事例にまとめてみると、本当によくがんばったなと感じる」というのがありました。日々、時間は流れていく中で、こうして

立ち止まって自分たちの成果を振り返ることは、自分の仕事に対する肯定感を高め、また、頑張ろうという新たな気持ちになれるのだと感じました。また、外部の人に聞いてもらえたことも、身内だけで終わるのではなく、別の施設で体験されたことを聞く機会となり、刺激にも勉強にもなりました。本当に参加させていただき感謝しています。ありがとうございました。（森 佳緒 里）

■■■ 今後の予定 ■■■

■日本語プロジェクト

3月18日(水)19:00~21:00 スピーチ会
in ホテルサーブアスタ

■立命館大学ネクストリーダープログラム受け入れ

3月18日(水)~19日(木)

■就学前の子どものプレスクール

1月17日(土)~3月28日(土) ※3月7日(土)を除く

新長田教室: 10:30-12:00

はいず教室: 14:00-15:30